

玉里文庫所蔵太平天国印書と五代友厚

池田昌広

一 問題の所在

島津久光（一八一七～一八八七）にはじまる島津家の分家——玉里島津家の旧蔵書が鹿児島島田大学附属図書館に収蔵されている。それらは玉里文庫と命名され、いま玉里文庫目録作成委員会編『玉里文庫目録』（鹿児島大学附属図書館、一九六六年）によって全貌を知ることができる。^①このうちに三点の太平天国印書が見える。小文はこの三書がいかなる経路をへて玉里島津家に蔵せられたのか、その入手ルートを推論するものである。太平天国印書とは太平天国が刊刻した一連の出版物をいう。太平天国はいままでもなく、一八五一年から一八六四年まで、江南を中心に勢力をたもった反清政権である。かれらは首領たる洪秀全の詔書や太平天国の規程・曆など、四十数種を印刷頒布した。発行部数は大量であったらしいが、清朝の焚書によって伝存するものは極めて少ない。また現存するものの過半は欧米に蔵せられる。^②

玉里文庫が蔵する太平天国印書はつぎの三点、①『太平詔書』一卷、②『頒行詔書』一卷、③『太平軍目』一卷、ともに太平天国壬子二年（一八五二）原刊本である。『玉里文庫目録』には天部八三六「太平詔書三冊」として一括著録されている。日本国内で確認された太平天国印書の原刊本としては、おそらく唯一の例であ

ろう。玉里文庫にはさらに清人による太平天国関聯の著作三点も見える。すなわち、④謝介鶴『金陵癸申摭談』一卷二冊（咸豊六・一八五六年刊本。『玉里文庫目録』天部八三三）、⑤姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』一卷一冊（咸豊五・一八五五年刊本。同前八三五）、⑥樗園退叟『盾鼻隨聞録』八卷三冊（鈔本。卷一・二の上冊のみ存、中下冊は「腐本廢本」の由。同前一二五八。もと咸豊四・一八五四年刊）である。⁽⁴⁾

このうち⑥をのぞく五書については、高津孝の專論がある。⁽⁵⁾高津は①②③の入手経路について二つの可能性——英国経路と琉球経路—toに言及する。とくに論拠の提示はない。高津論文の趣意は上掲①から⑤の紹介にあり、入手経路の推論は附属的に述べられた。薩英戦争（一八六三年）後の薩摩と英国との急接近を勘案すれば、英国経路の可能性はたしかに想起されよう。アヘン戦争の勝利により江南に進出した英国は太平天国の情報を熱心に蒐集したはずで、太平天国印書の現存本の多くが英国につたわるのはその一証だろう。琉球経路の可能性も確かにある。琉球と薩摩との関係はいま詳述しないが、福州に琉球館を置き二年ごとに北京へ進貢使節を派遣した琉球は、かなり確度の高い太平天国情報を薩摩に報告している。⁽⁶⁾報告の一環に太平天国印書の献上があったかもしれない。

しかし可能性でいえば、もう一つの入手経路が考えられる。五代友厚が上海において英人宣教師のウイリアム・ミューアヘッドから入手し久光に献上した可能性である。小文はこの五代入手説の合理性を説くことに費やされる。さらに④⑤⑥も五代が上海から舶載した可能性が小さくない。ただ史料的な限界があり、状況証拠の提示にとどまることを断っておかねばならない。

二 五代友厚の上海渡航

五代友厚（一八三五—一八八五）について、詳細な紹介は不要であろう。幼名は才助、もと薩摩藩士。明治政府に短期間任官したのち実業界に転じ、大阪商法会議所を創立し初代会頭となるなど大阪財界で重きをなした。かれは少なくとも三回、上海に渡航している。第一回は文久二年（一八六二）一月、第二回は同年四月、第三回は慶応三年（一八六七）八月である。⁽⁷⁾ 五代の上海滞在中の動静については徴すべき史料が少なく、伝記研究者を悩ましてゐる。小文は第二回渡航に注目したい。

このとき五代は、江戸幕府が派遣した千歳丸に水夫に扮して乗船し上海にわたった。まず旅程をしめせば、文久二年四月二十九日（一八六二年五月二十七日）に長崎を出航、五月六日（六月三日）に上海着、七月五日（七月三十一日）に上海を発ち、七月十四日（八月九日）に長崎に帰帆、約二箇月の上海滞在であった。

千歳丸に乗った日本人は都合五十一名（ほかにイギリス人船員ら欧州人十六名）。このうちの十一人の手になる公式あるいは私的な記録が発見されている。⁽⁸⁾ これら諸記録に五代の動静を伝えるものがある。小文にとつて重要なのは高杉晋作と中牟田倉之助とがのこした上海滞在記である。高杉は幕末の志士として著名であり、中牟田は佐賀藩士、のちに海軍中将・子爵にのぼった。両者は五代と上海で親密に交際し、しばしば行動をともしたので、二人の手録に五代の動静が記録されることになった。このうちに五代が太平天国印書を入力した可能性をしめす記載がある。なお五代自身の手録は見つかっていない。

高杉と中牟田との手録について整理しておく。高杉は「遊清五録」と自称した「航海日録」「上海淹留録」「外情探素録」「内情探素録」「崎陽雑録」の五種をのこした。いま最善本である、田中彰編『開国』（日本近代思

想大系一、岩波書店、一九九一年）所収の田中校注「遊清五録」による。高杉の原文は漢文の部分が多い。そのばあい田中校注本の書き下し文を引く。中牟田も都合五件の記録を残した。すなわち「上海行日記」「上海滞在中雑録」「公儀御役々唐国上海表にて道台其外と応接書」「長崎より唐国上海迄渡海日記」そして文久元年十二月二十五日から同二年四月二十六日までの「日記」である。小文はこのうち「上海行日記」を、春名徹「中牟田倉之助の上海体験——『文久二年上海行日記』を中心に」（『国学院大学紀要』第三五巻、一九九七年）の翻刻によって利用した。⁽⁹⁾

五代と高杉と中牟田との親密ぶりを伝える記録を二、三見よう。高杉「航海日録」の文久二年五月三日条に「此の日始めて同船の水夫才助なる者と談ず。才助は薩州藩の五代才介なり。形を変じて水夫と為り、此の船に入ると云ふ。才介さきに予を崎陽の寓舎に訪ふも、予時に病に在り、談ずるを得ず。一見して旧知の如く、肝胆を吐露し、大いに志を談ず。亦た妙なり……」とあり、同「上海淹留録」五月十七日条に「午前、中牟田・五代と川蒸気船に至り、諸器械を見る」とある。また中牟田「上海行日記」六月九日条には「薩摩五代才助と談合」とある。このように三人はしばしば面晤し情報交換をしていた。

念のため言いそえる。小文はくだんの漢籍の入手を、第二回上海滞在時に限定するものではない。史料的な限界から第二回の上海渡航のみを検討対象にしたのであって、第一回と第三回での入手の可能性も排除しない。ただ第二回滞在時に五代がミュアヘッドと面晤した記録があり（後述）、少なくとも当該時が入手の時期にふさわしいとは考えられる。

三 ミュアヘッドについて

高杉「上海淹留録」に以下のごとくある。

朝、五代と英人ミユルヘットを訪ぬ。ミユルヘットは耶蘇教師にして、耶蘇教を上海士民に施せり。城内の教堂はミユルヘットの関はる所なり。ミユルヘットの常に居る所も亦た教堂と病院とあり、施医院と謂ふ……聯邦志略等の書を需めて帰る。
(五月二十三日条)

朝、五代と英人ミニユヘルトを訪ぬ。不在にて、空しく帰館す。
(五月二十五日条)

中牟田と英人ミニユヘルに至る。上海新報・数学啓蒙・代数学等の書を需めて帰る。
(五月二十七日条)

中牟田と外行し……去りてミユルヘルを訪ぬ。不在にて空しく帰館す。
(六月十六日条)

高杉が「ミユルヘット」「ミニユヘルト」など記した人物は、ロンドン伝道会の宣教師であつたウィリアム・ミュアヘッド (William Muirhead、一八二二～一九〇〇) である。注目したいのは、五代がミュアヘッドを訪問していた事実だ。後述するように、中牟田の記録にもミュアヘッドの名は頻出する。

ミュアヘッドの経歴を紹介しておく。かれはスコットランド南東部の港町リース生まれ(現在はエジンバラ市に併合)。短期間エジンバラ大学にかよつたのち弁護士事務所に入るも、宣教師になることを決意し、ロンドン近郊の神学校チェサント・カレッジに入学した。卒業後の一八四七年にロンドン伝道会の宣教師として上海に赴任し、当地で中国語を身につけ、上海を中心に布教活動に献身した。一九〇〇年十月、上海にて歿、享年七十八。かれは「慕維廉」の漢名で六十点餘りの中国語の著作をもつた(過半は翻訳)。このうち『地理全志』(一八五三～五四四年上海刊)、『大英国志』(一八五六年上海刊)の二書は、幕末期日本人の海外認識

に大きな影響をあたえたことで名高い⁽¹⁰⁾。

ミアヘッドは太平天国印書を所蔵していた。このことは次章で中牟田ほかの手録から確認することにして、いまミアヘッドが同印書を所蔵していた事情を述べよう。要するに、かれは太平天国の洪仁玕（一八二二～一八六四）と親しかったのだ。洪仁玕は、洪秀全の族弟として後期の太平天国を指導した人物である。幼少のころから洪秀全と親しく上帝会の創設にも関わったらしいが、金田蜂起（一八五一年）には参加できず、香港や上海で逃亡生活をおくった。ようやく一八五九年に南京で太平天国と合流し、洪秀全の絶大な信頼を得て、開朝精忠軍師頂天扶朝綱干王に封ぜられ政策面の最高責任者となる。南京が陥落した一八六四年に南昌で刑死した。

洪仁玕とミアヘッドとの交誼は、洪仁玕が著した『資政新篇』で友人の名を列記して、「英吉利即俗称紅毛邦……現有理雅各・湛孖士・米士威大人・俾士・合信・覺士・濱先生・慕維廉・艾約瑟・韋律衆先生与小弟相善也」とあることからもうかがえる（排印修訂本『太平天国印書』六八二～六八三頁）。二人は同い年である。洪仁玕は上述の逃亡中、一八五三年十月にバーゼル伝道会のハンバークから洗礼を受けキリスト教徒となった。香港でハンバークに師事しキリスト教への理解をふかめ、一九五四年五月に上海に向けて発ち、ロンドン伝道会のメドハーストのもとを訪れる。このときミアヘッドと相識になったようだ。一八五五年春に香港にもどり同地のロンドン伝道会に雇用された。宣教師たちからの評価はたかく、短期間で牧師に次ぐ重要な存在となった。そしてロンドン伝道会の支援のもと一八五八年六月に香港を發ち、翌年四月に南京に入り、太平天国と合流したのは上述のとおり。洪仁玕がロンドン伝道会と近いことは諒解されよう。

太平天国が奉じる上帝教はプロテスタント・キリスト教の影響下にあるため、在華のプロテスタント宣教

師たちは布教の拡大を期待し太平天国に接触した。とくに洪仁玕への期待から、ロンドン伝道会は南京をあらたな布教拠点にしようと、幾人もの宣教師が南京を訪問した。ミュアヘッドも一八六一年二月八日、南京に入り約一箇月も滞在している。洪仁玕とは七年ぶりの再会であった。このおりミュアヘッドは太平天国印書を贈られたのではないだろうか。王慶成によれば、太平天国印書の頒布先は、第一に「太平天国内部的単位」、第二に「民人」、第三に「外人賓人」であった。⁽¹³⁾ この第三の範疇にミュアヘッドは入る。ミュアヘッドと洪仁玕との関わりを勘案すれば、ミュアヘッドが太平天国印書を所蔵していたのは故あることと思われる。

四 ミュアヘッドと太平天国印書

本章では、中牟田ほかの記録からミュアヘッドの太平天国印書所蔵を確認したい。まず高杉「外情探索録」の記事を引く。

○奏准天津新議通商條款、

○通商税則善後条約、

地理備攷、○金陵癸甲撫談、○粵匪紀略、諸蕃往來書、勸戒近録。

中牟田書写之書

天理要論、○太平詔書、太平礼制、天命詔旨書、○資政新篇。

○盾鼻随聞録。

○印之分長崎にて筆耕家え頼候分。

上記のうち「中牟田書写之書」として挙名された『天理要論』『太平詔書』『太平礼制』『天命詔旨書』『資政新篇』の五書は太平天国印書である。中牟田が上海で鈔写し持ちかえたのだ。また中牟田の将来品に「長

「髮賊著述書 但写本 十三冊」があつたらしい。「長髮賊」は太平天国を指す清朝の呼称である。十三冊のうちわけは不明だが、これらも太平天国印書の転写本と思われる。⁽¹⁴⁾

中牟田による鈔写の底本はミュアヘッドから借覧したものと推される。中牟田「上海行日記」六月十二日条に以下のごとくある。

英人ミュールヘッド処参り、質問致候事。／附り 同人江 華英通語老部式冊差遣ス。

同人、長髮賊著述の書四冊借り受持帰候事。

中牟田はミュアヘッドを「ミュールヘッド」と表記する。「長髮賊著述の書四冊」とは、春名もいうように、上掲「中牟田書写之書」に名の挙がった『天理要論』『太平詔書』『太平札制』『天命詔旨書』『資政新篇』のうち四冊と推定される。翌日以降の中牟田の動静を「上海行日記」から摘録すると以下のとおり。

六月十三日「終日、写本」

六月十四日「英人ミュールヘッド面会」

六月十五日「終日、旅宿罷在候事」

六月十六日「英人ミュールヘッド処へ参り、先日借受候書籍四冊、留置中ニ付、妻へ帰し置候事」

六月十九日「終日、旅宿罷在候。賊之書写本」

六月二十日「終日、旅宿罷在候。賊之書写本」

六月二十三日「終日、旅宿罷有候。賊之書写ス」

六月二十四日「右同断」

六月二十五日「右同断」

六月二十七日「終日、賊之書写ス」

筆耕にはげんだ「賊之書」は太平天国印書と推される。十二日に借りた「長髮賊著述の書四冊」を十六日に返却したとすれば、十九日以降の鈔写はあらたに借り出したか印書か、あるいは借り置いた別書があったか。詳細は分からないものの、このときの転写本が上述した「長髮賊著述書 但写本 十三冊」であったと思しい。ミアヘッドが『天理要論』『太平詔書』『太平札制』『天命詔旨書』『資政新篇』などの太平天国印書を蔵していたことは、まちがいないだろう。なお上引のように、十六日の訪問は高杉も同道している。

太平天国印書のほかにも、中牟田はミアヘッドから種々の書籍を購入している。「上海行日記」から引く。五月二十七日の訪問は、高杉「上海淹留録」にも記載あり（既引）。

五月二十二日「午後、英人ミュールヘッド処へ参り書籍買入候事。／附り 同人署述の書籍等遣候二付 貰請、持帰り其段申達候処、支無之由」

五月二十七日「午前高杉一同外出、英人ミュールヘッド処へ参り書籍相求候事。／附り 先二貰物致し 候二付返礼、扇子錦絵金紙広紙万人首、其外差遣候事」

六月二日「午前、英人ミュールヘッド処参る。魯人其外、北京住居ノ案承ル」

六月十八日「午後、高杉一同外出……其後、英人ミュールヘッド処へ参り、数学啓蒙、其外買入、ロンドンニユウス并新約全書、日本文典、同人より貰候事」

六月二十六日「英人ミュールヘッド処参り候へ共外出中二付、相求度書籍注文致し置、罷帰り候事」

六月二十九日「英人ミュールヘッド処参り書籍頼置候事」

六月三十日「英人ミュールヘッド処参り、数学啓蒙、其外買入」

果たして、中牟田と高杉とは頻繁にミュアヘッドを訪問し購書および書籍の借覧につとめたと分かる。借覽したうちには太平天国印書があつた。これらの事情を五代が知らなかつたはずはない。五代は高杉や中牟田と懇意だつたし、五代自身もミュアヘッドを訪問していたのだから。

千歳丸が上海に入港した時期は、太平天国軍による第二次上海侵攻の真つ最中であつた。すでに太平天国の乱に関する情報は日本に入つており、清朝をおびやかす内乱として朝野の耳目を集めていた。そのようななかでの上海渡航だから、千歳丸一行が太平天国につよい関心をしめし、その見聞録に太平天国の記述が少なくないのは自然なことだ。⁽¹⁵⁾ 中牟田が太平天国印書ほかを熱心に鈔写したのも、中国情報蒐集の一環であつたろう。

五 五代友厚と太平天国情報

では五代はどうしたのであるか。上述の第一回渡航で汽船を購入し鹿児島に回着させた五代である。かれが太平天国に無関心であつたとは、とても考えられない。むしろ積極的に情報の蒐集に努めたと推測するのが妥当ではないか。五代の手録が見つからないので、くだんの蒐集活動は同行者の記録から断片的にうかがうしかないが、たとえば納富介次郎「上海雜記」に下記の⁽¹⁶⁾ごとくある。

最モ意外ナリシハ、薩州ノ五代才助初ヨリ水手ニ身ヲ寔シ船底ノミニ居ラレタレバ、人々齒録セザリシニ、間ヲ偷ミテ遠ク出行シ、浦東アタリノ長髮賊ヲ剽攻アリシ合戦ヲサヘ見テ帰ラレシ由、コノコト誰モ知リタルモノ無ク、長崎ニ帰著ノ上ニテ知レタリ。

物見遊山で「長髮賊」すなわち太平天国軍との戦闘の現場に遠出したのではあるまい。

五代とミュアヘッドとの交渉がどのようなものであったか、よくわからない。ただ中牟田の例を想起すれば、五代も同様にミュアヘッドに積極的に接触し、かれから太平天国の情報を得ようとつとめたと考えるべきではないだろうか。ミュアヘッドが太平天国印書を所蔵することは、中牟田が知って五代が知らないわけはなく、五代も入手につとめたはずだ。そして原刊本の購入に成功し、これが玉里文庫の三点であったといえ、臆測が過ぎるだろうか。⁽¹⁷⁾ミュアヘッドに関する記録も豊富にはないようだから、これ以上の詮索は困難かもしれない。

小文の主張は以上につきる。最後に④『金陵癸甲摭談』、⑤『粵匪南北滋擾紀略』、⑥『盾鼻随聞録』の船載経路について、五代入手の推測を附言しておく。千歳丸一行の手録には、これら三書への言及が少なくない。たとえば、高杉「外情探索録」は帰帆した長崎にて三書の筆耕を依頼するむね述べる(既引)。中牟田は④を持ちかえった。⁽¹⁸⁾そのほかの記事を列挙する。

都ベテ賊ノ事ハ余ノ写ス盾鼻随聞録トクニツマビラカナレバ、唯近日ノ事ヲ記ス。

(日比野輝寛「贅脱録」五月十一日条)⁽¹⁹⁾

長髪之事、吾友謝炳曾做金陵摭談書一本、上面俱有。

(日比野「没鼻筆記」の「春舡」)⁽²⁰⁾

賊起改如何。此事難以尽言、坊中有書、名粵匪^{ママ}記略、一觀可知其細矣。

(峯潔「船中日録」五月十四日条の問答)⁽²¹⁾

粵匪^{ママ}記略ヲ見ルニ、長毛賊ノ起ル所以ン櫨^マ涼ノ形勢ヲ詳ニ記セリ。此書ハ當時直ニ絶版ニナリタル由ナリ……。

(名倉予何人「海外日録」六月五日条)

晡後小東門外諸街坊ヲ徘徊シ書坊ヲ過キリ金陵癸甲摭^マ歌ト云ヘル珍書ヲ見ル(是長毛賊猖獗ノ形勢広中

年中ノ折末ヲ記セシム書ナリ)

(名倉予何人「海外日録」六月六日条)⁽²²⁾

魯匪紀略二日ク、楊大朋者……コレ長髮賊ノ起源ナリ。

(納富介次郎「上海雜記」)⁽²³⁾

上述のように、長崎を發つまえから、かれらの太平天国への関心は高かった。上海での一行は、少なくとも上掲の数人は情報蒐集にとめた。④⑤⑥の三書は、太平天国研究の好文献として、購入あるいは鈔写の対象になったと思われる。

④⑤⑥は幕末から明治かけて和刻本が出るなどよく読まれたようだが、刊刻年から千歳丸による将来がその初伝であったと考えられる。それ以前に日本に舶載された徵証は見当たらない。⑥は清朝だけでなく太平天国も禁書に指定したらしく、刊本は稀覯であったため、一行が目にしたのは刊本ではなく鈔本であったと推される。玉里文庫本が刊本ではなく鈔本なのは刊本の入手が困難だったからだろう。なお⑥の和刻本(幕末刊)の巻末に「浪速 伊藤之幹校」とあるこの人物は、千歳丸一行の一人・伊藤軍八である。⁽²⁴⁾その将来の経路をよくものがたる。

さて五代にもどうう。懇意の高杉と中牟田とをふくむ幾人も千歳丸乗船者が、言及あるいは鈔写する④⑤⑥を、五代が知らないはずはない。かれが持ちまへの行動力を發揮し、④⑤の刊本と⑥の鈔本とを手に入れたと推測するのは、そう無理な話ではなからう。

以上、①から⑥の諸書を玉里文庫にもたらしただのが五代である可能性を述べてきた。およそ推測の域を出ないが、一定の蓋然性はあると考える。小文の主張が是認されるとすれば、従来あまり分明でなかった上海における五代の事蹟について、一事項を追加したことになる。

注

- (1) 玉里文庫は和漢の典籍が中心で、総点数二千六百七十餘点(約一万八千九百冊)。このうちから刊本の漢籍・準漢籍のみを取り出し四部分類にて整理した、高津孝編『玉里文庫漢籍分類目録』(鹿児島大学附属図書館、一九九四年)もある。なお、玉里島津家に伝わった文書類のほとんどは、鹿児島県立歴史・美術センター黎明館に所蔵されている。
- (2) 王慶成『太平天国の文献和歴史——海外新文献刊布和文献史事研究』(社会科学文献出版社、一九九三年)三〇七頁が四十四種を一覧する。同書とモスクワ所蔵本を調査した王慶成「記俄羅斯科学院漢学図書館収蔵太平天国印書」(『近代史研究』一九九四年第四期)とで、中国国外の現存本はかなり網羅されたるうが、玉里文庫本への言及はない。太平天国印書の現存書は、太平天国歴史博物館編『太平天国印書』(江蘇人民出版社、一九六一年)と、王慶成編『影印太平天国文献十二種』(中華書局、二〇〇四年)とに影印されている。前者影印本を簡体字で修訂排印した太平天国歴史博物館編『太平天国印書』(江蘇人民出版社、一九九七年)もある。また十種の太平天国印書を影印した、王重民編『太平天国官書十種』(江蘇広陵古籍出版社、一九九二年。初版一九四八年)もある由だが未見。なお太平天国印書では「国」字のなかを「王」字に作るが、いま通常の「玉」字に従う。
- (3) 太平天国の乱のおり清軍の陣営で書記をしていた汗瑩の仮名という。増田渉『西学東漸』(岩波書店、一九七九年)一七七―一七八頁。
- (4) 二〇二二年八月二十九日に鹿児島大学附属図書館を、京都産業大学文化学部の笹部昌利准教授(明治維新史)とともに訪問し、④は現物を、そのほか五書を同図書館内で公開されている画像データで閲覧した。五代の書込があるかもしれないと期待したが、書込はまったく確認できず、小文の主張に有用な情報は得られなかった。⑥は数人の手になる鈔本で、字体からおそらく鈔者は日本人と思われる。ただ五代の手とは確認できない。閲覧にあたっては、鹿児島大学附属図書館、同大学法文学部的小林善仁准教授のご高配をえた。記して謝意を表す。
- (5) 高津孝「鹿児島大学附属図書館玉里文庫に見る薩摩藩の海外情報収集——太平天国印書を中心に」(『鹿大史学』六四・六五号、二〇一八年)。
- (6) 真榮平房昭「幕末期の海外情報と琉球——太平天国の乱を中心に」(『琉球海域史論』下、榕樹書林、二〇二〇年。初出一九八七年)。
- (7) 五代はこの三回以外に上海に密航した可能性がある。渡航の回数をおくめ、五代の上海渡航については、宮本又次『五代友厚伝』(有斐閣、一九八一年)一一―二五頁、田付茉莉子『五代友厚』(ミネルヴァ書房、二〇一八年)

一七〇二頁、八木孝昌『新・五代友厚伝』（PHP研究所、二〇二〇年）七八〇―八三頁を参照。

- (8) それらの大半は、春名徹「峯潔の上海経験——「船中日録」と「清国上海見聞録」」（『調布日本文化』八号、一九九八年）注(2)に整理紹介されている。二点だけ落ちているので追加する。一つは岩瀬弥四郎（『上海記録』文久元々2年）、もう一つは納富（柴田）介次郎「上海談聞書」、ともに未刊のようだ。前者は長崎歴史文化博物館蔵（資料番号…へ1779）、横山宏章「文久二年幕府派遣「千歳丸」随員の中国観」（『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第三号、二〇〇二年）で紹介されたことがある。後者は佐賀大学附属図書館蔵、三ツ松誠「貴重書紹介「柴田介次郎上海談聞書」（小城鍋島文庫）」（『ひかり野 佐賀大学附属図書館報』No.41、二〇一七年）に簡単な紹介がある。前者の筆録者・岩瀬弥四郎（一八三〇 or 一八三二―一八九一）は蘭通詞、五代友厚の生涯の親友であり、財界人としての五代の活動を終生ささえたことで知られる。両者の交友は五代の長崎時代（一八五七―一八六八）に始まるようで、千歳丸への五代の乗船も岩瀬の尽力があったらしい。両者の親密から岩瀬の記録に小文にとつて有用な記載がないか、複写を入手し一閲したが皆無であった。当該文書は岩瀬の個人的記録というより、実務的な控えといふべき性格の冊子のようだ。千歳丸一行の記録については、沖田一「幕府第一次上海派遣官船千歳丸の史料」上下（『東洋史研究』第一〇巻第一号、第一〇巻第三号、一九四七・四八年）、春名徹「一八六二年幕末千歳丸の上海派遣」（田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館、一九八七年）も参照。

- (9) 「公儀御役々唐国上海表にて道台其外と応接書」も、春名「中牟田倉之助の上海経験再考——「公儀御役々唐国上海表にて道台其外と応接書」を中心に」（『国学院大学紀要』第三九巻、二〇〇一年）に翻刻されているが、同書は幕府の機密記録を中牟田が筆写したもので、小文が目立つべき記事はない。そのほかの三件は未刊のようだ。いま中村孝也『中牟田倉之助伝』（中牟田家刊、一九一九年）などの引用文を通して見るほかない。

- (10) ミュアヘッドについては、吉田寅編『十九世紀中国・日本における海外事情撰取の諸資料——『聯邦志略』『地理全志』『大英国志』の資料的考察』（立正大学東洋史研究室、一九九五年）、同『中国プロテスタント伝道史研究』（汲古書院、一九九七年）第六章、八耳俊文『格物窮理問答』の成立と本文」（『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第九号、二〇〇一年）、劉芬「慕維廉研究綜述」（『中国高校人文社会科学信息网』<http://www.sinoss.net>）など参照。なお手録を見るかぎり中牟田はミュアヘッドを「地理全志」「大英国志」の撰者・慕維廉とは認識していないようだ。名倉予何人「支那聞見記」に「慕維廉」への言及があるが、当時上海在住のミュアヘッドに同定してない。小島晋治編『幕末明治中国見聞録集成』第十一巻（ゆまに書房、一九九七年）一六八・一八〇頁。

- (11) このあたりの事情は、倉田明子『中国近代開港場とキリスト教——洪仁玕がみた「洋」社会』（東京大学出版会、二〇一四年）第二章「洪仁玕とキリスト教」に詳しい。
- (12) 郭廷以『太平天国史事日誌』（商務印書館、一九四六年。上海書店、一九八六年影印）七四一頁、茅家琦『太平天国対外関係史』（人民出版社、一九八四年）三二一―三二四頁、倉田明子『中国近代開港場とキリスト教——洪仁玕がみた「洋」社会』（前掲）一三五―二四四頁。
- (13) 王慶成『太平天国的文献和歴史——海外新文献刊布和文献史事研究』（前掲）八―九頁。
- (14) 中村孝也『中牟田倉之助伝』（前掲）二五四頁、春名徹「中牟田倉之助の上海体験——『文久二年上海行日記』を中心に」（前掲）六四頁。「中牟田書写之書」の五書を十三冊に分写したか、あるいは五書以外の転写本もあったか不明。中牟田「上海滞在中雑録」は太平天国著述書目として十八種を挙げるよし。春名徹「中牟田倉之助の上海体験——『文久二年上海行日記』を中心に」（前掲）六六頁（注）から十八書を転引する。高杉のいう「中牟田書写之書」の五書はゴシックでしめす。
- 太平軍目（壬子太平天国二年）、太平条規（壬子）、三字経（三年）、天父皇言題皇詔（四年寅）、醒世文（八年午）、太平救世誥（四年寅）、太平礼制（八年午）、資政新編（九年未）、天父詩（七年巳）、天理要論（四年寅）、天命詔旨書（三年）、太平天国奏准頒行詔書（三年）、建天京於金陵論（三年）、貶妖穴為罪隸論、太平詔書（二年）、幼学詩、旧遺詔聖書、新遺詔聖書。
- すべて太平天国印書である。ゴシックの五書以外の印書も、中牟田は転写していた可能性がある。名倉予何人「支那聞見記」が「建天京於金陵論ト云ヘル書ヲ見ルニ、太平天国癸好三年新鑄ト題セリ、是ハ長髪中人、定京ノ議論ヲ集メタル珍書ナリ……」という。前掲『幕末明治中国見聞録集成』第十一巻の一八九頁。名倉の手録には「同行ノ士」として中牟田がしばしば登場するから、名倉は中牟田から『建天京於金陵論』を見せられたのではないか。そうだとすれば、ミュアヘッドからの借覽書に『建天京於金陵論』もあって、中牟田はこれをも転写した可能性がある。

(15) 市古宙三「幕末日本人の太平天国に関する知識」（『近代中国の政治と社会』東京大学出版会、一九七一年。初出一九五二年）一二四頁、増田渉『西学東漸と中国事情』（前掲）一七九―一八〇頁など参照。

(16) 小島晋治編『幕末明治中国見聞録集成』第一巻（ゆまに書房、一九九七年）一一頁。

(17) 千歳丸での上海渡航にあたって、五代は久光から允許と密命とを得たとの説がある。そうであれば、五代は君命

を奉じいっそう熱心に印書の購入にとめたろう。大久保利謙「五代友厚の欧行と彼の滞欧手記『廻国日記』について」(『大久保利謙歴史著作集』第五卷、吉川弘文館、一九八六年。初出一九六二年)二八三頁および注7、新谷九郎「解説——五代友厚伝の「考証」的再検討」(日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』第四卷、東洋経済新報社、一九七四年)二一七～二一九頁参照。

- (18) 中村孝也『中牟田倉之助伝』(前掲)二五四頁、春名徹「中牟田倉之助の上海体験——『文久二年上海行日記』を中心に」(前掲)六四頁。
- (19) 前掲『幕末明治中国見聞録集成』第一卷七七頁。
- (20) 前掲『幕末明治中国見聞録集成』第一卷一六八頁。
- (21) 春名徹「峯潔の上海経験——「船中日録」と「清国上海見聞録」」(前掲)五六頁。
- (22) 六月五日条と六日条と、田崎哲郎「史料紹介 名倉予何人「海外日録」——文久二年千歳丸関係史料」(『愛知大 学国際問題研究所紀要』第八三号、一九八六年)一〇五頁、前掲『幕末明治中国見聞録集成』第十一卷の一二一～一二二頁。
- (23) 前掲『幕末明治中国見聞録集成』第一卷の三六～三七頁。
- (24) 増田渉『西学東漸と中国事情』(前掲)一七七～一八二頁、同『雑書雑談』(汲古書院、一九八三年)三〇・九九～一〇二頁、春名徹「峯潔の上海経験——「船中日録」と「清国上海見聞録」」(前掲)九八～一〇〇頁。